

ガリラヤ民衆が聴いたこと

聖書に親しみ祈る会 松中照夫

聖書をしっかり味わい、祈りの時を持ちたいと徹也・明子両先生に相談しました。その結果、途絶えていた「聖書に親しみ祈る会」が2017年4月から再開されました。

この会では、山口里子さんの著書を参照し、「イエスのたとえ話」を学んでいます。山口さんはその著書で、教会の伝統的な聖書理解とは違う視点から聖書を見直されています。イエス様が接したガリラヤの農民を中心とする民衆の立場からの見直しです。彼らは、ローマ帝国によって抑圧された下層階級でした。とりわけ女性は家父長制の濃いユダヤ社会で徹底して差別され、人数に数えられない無視された存在でした。こうした下層階級の民衆からの視点は、教会の伝統的な聖書理解の視点とややちがっています。

「聖書に親しみ祈る会」では、まず、当日対象となるイエスのたとえ話の聖書の箇所を出席者で輪読します。その後5分間黙読し、その箇所をどう理解するのかを考えます。対象のたとえ話は、説教で何度も解説してもらっています。ですから、私は知らず知らずのうちに、伝統的な理解になじんでいました。優等生的理解なのです。

しかし、山口さんの視点からみると、その優等生的理解がひっくり返されます。毎回「えっ、そうだったのか、そういう理解の仕方があるのか」という、いわば「目から鱗が落ちる」感覚です。これがとても刺激的です。民衆の側に立つイエス様の教えは、当時の支配者側から見ると、まことに過激な主張であったこともよくわかります。

現在の日本は格差社会が広がっています。行き過ぎた経済効率優先の結果です。山口さんの視点は、この格差社会で差別され、しいたげられている弱い者の立場にも通じるものです。教会が地域社会に開かれた窓口となるには、こうした視点での聖書理解がとても大切だと思うようになりました。

新しい視点で聖書を見つめ直す刺激的な時間を、この会で共有して欲しいと思います。毎月第3金曜日、午後6時30分開始、8時終了です。お待ちしております。



「やもめと裁判官のたとえ」から
新自由主義経済のおかしさへ！



こちらは、第3日曜日、礼拝後の祈祷会。
1ヶ月の恵みと苦勞を分かち合い祈ります。

おわりに (辻中徹也)

すべての人が、その人らしく、その人なりに暮らしていくことが実現する場。
教会との「さかいめ」を大切に、尊重しあいながらの活動をイエスにゆだねてきました。
教会だけではできない業が実現していく。その場に居合わせることは驚きであり、
とても楽しいことです。おもしろ仲間たちは伝道の対象でなく、宣教の主体になることを
求めているとわたしは感じます。
勇気を持ってゆだねると、一歩踏み出すおもしろ仲間がやってきた！